

自閉スペクトラム症リスクの高い大学生の適応要因の検討 —アスリート大学生と非アスリート大学生の差異に着目して—

つち だ や よい
土 田 弥 生

〈要 旨〉

自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder:以下ASD)リスクの高い子どもたちは、思春期・青年期において、二次障害や自我同一性の問題に直面することにより不適応に陥る傾向が高い。その心理的危機を回避していると考えられるASDリスクの高いアスリート大学生が保持する適応要因としての本来感と本来感に関連する要因の様相が、どのようなかを非アスリート大学生と比較検討した。結果、すべての要因において、アスリート大学生の得点が非アスリート大学生の得点より高く、特にASDリスクの高いアスリート大学生が保持する適応要因のうち、エゴ・レジリエンス(以下ER)は、他のどの学生よりも高く保持しており、さらに自己効力感においても非アスリート大学生と比較して高く保持していることが明らかとなった。この高く保持しているERと自己効力感が、ASDリスク傾向の高いアスリート大学生の思春期・青年期を乗り切るための本来感の維持に寄与していることが示唆された。

〈キーワード〉

自閉スペクトラム症, 本来感, エゴ・レジリエンス, 自己効力感, 友人サポート

I. 問題と目的

1. はじめに

大学生の修学の問題として取り上げられることが多くなった発達障害を起因とする不適応の問題に、ASDに関する問題が存在する。

ASDは、DSM-5(2013)によれば、対人コミュニケーションと対人相互反応の欠陥、行動、関心、活動における限定的で反復的な様式に基づき診断される。ASD特有の認知・行動特性は健常

者にも存在し、ASD者から健常者の間にスペクトラム状の広がりを持つため、どこからどこまでが健常者であり、どこからがASD者であるという境界の特定は難しい¹⁾(神尾陽子・森脇愛子・武井麗子・稲田尚子・井口英子・高橋英俊・中鉢貴行, 2013)ことから幼児期・学童期に発見に至らず、あるいは家族も診断が受け入れにくいことも相俟って思春期以降不適応状態となり問題が重篤化して初めて診断を受け入れるケースが報告されている(井上, 2010)。そのためASDリスクの高い児童生徒は、わがまま、自分勝手、変わっているという見方をされ、周囲から不適切な扱いを受けることが多いことから自己肯定感や自己効力感が低下し、不登校やうつ、不安障害、強迫性障害などの二次障害に陥りやすい(内山・江場, 2004, 柳楽, 2017)。さらに神尾ら(2013)は、実施したテスト²⁾のカットオフポイント以下の人にも適応が困難となっている人たちの存在を報告しており、ASD特性が一定以上表れると社会適応が困難になることを明らかにした。

ASD児者が、思春期・青年期に二次障害に陥る原因の一つに、自己同一性(identity: 以下アイデンティティと表記)の問題が存在する。この頃、他者の心への出会い、自己の異質性への気づきから他者との違いに気づき始め、自分は一体何者か、自分のことが良く理解できない(ガーランド, 2000; 綾屋・熊谷, 2010)などアイデンティティに関する混乱が生じやすい。そのため心身が不安定な状態に陥り、対人場面における度重なる不適切な対応を取られることが、二次障害の引き金となりやすい(内山・江場, 2004)。したがって、自分自身を形成していく思春期・青年期において獲得されるべき心理社会的課題である明確なアイデンティティを形成していくことが、将来に対する不安や人生に対する無力感、職業生活に対する混乱の低減につながると考える。

アイデンティティは他者との相互作用の中で行われているものである(市川, 1992)が、ASD者は対人関係が苦手な人が多く他者との関係構築が難しい人が多いことから、アイデンティティの確立が容易ではないことが指摘されている(滝吉・田中, 2011)。だが、大学生活を適応的に送るASDリスクの高い大学生は、彼ら自身の認識するアイデンティティの保持に関わる力を獲得しているのではないだろうか。

アイデンティティの獲得に関与する概念の一つに自尊感情がある(Heatherton & Wyland, 2003)。近年自尊感情の研究において、高い自尊感情は適応的なものと不適応的なものが存在していることが明らかとなっている(Deci & Ryan, 1995)。Kernis(2003)は、何ものにも邪魔されない「本来性」を反映している適応的な自尊感情こそが、最良の自尊感情であるとし、伊藤・小玉(2005)は、最良の自尊感情を「本来感(sense of authenticity)」と表記し、「自分らしくあること」とした。自分らしくある本来感を高く感じていれば、現在の自分自身の欠点を自我脅威として受け取ることなく、安心してどのような局面においても自分を活かすことが出来る(Kernis, 2003; 伊藤, 2006)。さらに適応を促進する要因としての自律性や心理的well-being、自己効力感とも関連の深い概念でもある(伊藤, 2006)。

ASD者の適応的な成長が可能な要因として、佐々木(2010)は、良き理解者の存在をあげている。特に思春期・青年期における自己確立の過程のなかで重要な他者に受け入れられ、心理的

自閉スペクトラム症リスクの高い大学生の適応要因の検討：アスリート大学生と非アスリート大学生の差異に着目して

に支えられているという感覚(サポートの知覚)が持っていることが重要である。安心できる関係性の中においてこそ自己や他者に柔軟にかかわることが可能となると述べている。本田(2017)は、ASDの診断をした子どもたちの中で、成長後ASDの診断基準を充たさなくなった者の存在を報告している。その報告によると、家族を含めた周囲の環境が特性を理解すると共に、ASD者である彼ら自身が、自分の特性を受容し、自己コントロール力(自律性)を保ち、自分の能力を超えた時に誰かに相談できる力を保持していると述べられている。両者の見解よりASD者の適応要因として、本人自身が自分の特性を十分理解したうえでその特性を受容し、周囲の理解のもと自律性と自分らしさを保つことが出来ていることと言えらるう。

障害者差別解消法の施行(2016)にともない、公的教育機関は、子ども個々の特別な教育ニーズを「合理的配慮」として定め、合理的配慮の提供者となることが義務化された。それに伴い教育機関においてはユニバーサルデザインに基づく授業の提案もなされてきている。だが、個々のニーズに基づきカスタマイズされた環境の完璧な実現は、現実的ではない。そのため当事者においても、提供している環境に自らが適応可能な力を身に付けていく必要があるらるう。

2. 本研究の目的

ASD児の療育における身体感覚の統合や遊びの中で体を動かす運動の効用、多動などに対して剣道や柔道の効用が注目されてきている。スポーツの効用として、スポーツを通じて他者との相互作用による情動や身体感覚、充実感、一体感を得る経験を積むことでアイデンティティが高まると考えられている(江田・伊藤・杉江, 2009)。スポーツを通じて得ることの出来るスポーツマン的アイデンティティ³⁾の危機(中込, 1988)について、自己形成の外的要素に関わるアイデンティティ形成に付随して生じる自我の発達、スポーツマン的アイデンティティには認められないとの批判がある。しかしASD者やASDリスクの高い者にとっては、スポーツ競技を続けていくことに自己の存在価値を見出すことで、アイデンティティが高まり、本来感をより高く保つことが可能となり、思春期・青年期の危機を回避出来ているのではないかと推測する。ASDリスクの高い者の二次障害の予防という課題に対し、思春期・青年期におけるアイデンティティの危機の回避という側面から焦点を当てた研究はあまり見当たらない。生得的なリスクを抱えながらも健常者と同様に大学生活を送るASDリスクの高い大学生が保持する適応要因の検討は、ASDリスクの高い子どもたちが、思春期・青年期に陥りやすい二次障害リスクの予防的介入を検討する際の示唆を得ることが出来るといえるらるう。

そこで本研究においては、本来感とその本来感やASD者の適応に関連する自律性としての自己コントロール力、自分の能力を信じることの出来る自己効力感、自分が支えられていると感じられ、困った時にサポートを求めることが出来るソーシャルサポートにおいて、アスリート大学生の方が非アスリート大学生よりも高いという仮説を設定した。その仮説よりスポーツを通じて得られるアイデンティティが、思春期・青年期の二次障害リスクを回避することを可能とする要因と成り得ることの証

明を目的とする。その際ASDと非ASDの境界を正確に定めることが難しく、ASDの診断範囲外においても不適応状態に陥る可能性が示された(神尾ら, 2013)ことを考慮し、ASDリスクの高さ別にアスリート大学生と非アスリート大学生が培ってきた本来感と本来感を高めることに寄与する自己コントロールとしてのER(佐々木・土田, 2016)、自己効力感、サポートの知覚であるソーシャルサポートの保持状態を比較検討することで仮説の証明を行うことを目的とする。

II. 方法

1. 調査時期および調査協力者

平成27年6月上旬に関東地方の大学、7月中旬に中国地方の大学、計2大学での調査を行った。なおアスリート大学生は中国地方の大学の学生であり、全員がスポーツ学科に所属しており、日本国内のいずれかのスポーツ競技団体に所属し、競技大会参加による授業欠席を公欠扱いとするなどの修学上の配慮を受けてスポーツ競技力向上を目指しつつ勉学との両立を目指している大学生である。

2. 調査の手続き

本研究の調査にあたり、調査協力者となる大学生の講義が終了と同時に質問紙を配布し、無記名、自記式にて実施、その場で回収した。調査時間の制約により、項目数の少ない尺度の選定を心がけた。倫理的配慮として、質問紙配布時に「回答の義務はない」「成績とは無関係である」「調査内容は博士論文や学術誌で発表する」「回答の途中で気分が悪くなったら直ちに回答作業を中止する」「途中で中止しても何ら問題ではない」、自由意思による同意に基づき、質問紙への回答をもって調査参加への意思があると判断することを口頭で説明し、同様の内容をフェースシートにも記載した。この調査は吉備国際大学大学院心理学研究科倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号:15-21)。

3. 調査内容

(1) デモグラフィックデータ

年齢、性別について記入を求めた。

(2) 自閉性スペクトル指数 (Autism-spectrum Quotient)

10項目版(AQ-J-10)(Kurita, Koyama, & Osada, 2005)(以下AQと略す)自閉スペクトラム症の診断を識別する能力の高い10項目を抽出した尺度を用いた。「社会的スキル」「注意の切り替え」「コミュニケーション」「想像力」の下位尺度で構成されている。自分に当てはまることについて、「確かにそうだ:4」から「確かにちがう:1」の4件法で回答することを求めた。Kurita et al(2005)

自閉スペクトラム症リスクの高い大学生の適応要因の検討：アスリート大学生と非アスリート大学生の差異に着目して
によって信頼性と妥当性が示されている。AQ-J-10 のカットオフポイントを7とした場合の診断判別精度は88%である。

(3) 本来感尺度

伊藤・小玉(2005)により作成された1因子7項目の尺度を用いた。自分自身のことについて当てはまる内容を「あてはまる：5」から「あてはまらない：1」の5件法で回答を求めた。

(4) Ego-Resiliency (以下ER89)日本語版

畑・小野寺(2013)により日本語版14項目で構成された尺度である。ER89日本語版は、日常的な内外のストレスに対して柔軟で臨機応変な対応ができる個人が保持する能力を測定する尺度である。そのため、自律性や自己コントロールとも関わる尺度として本研究では採用した。自分に当てはまることについて答えを「非常にあてはまる：4」から「まったくあてはまらない：1」の4件法で求めた。

(5) 自己効力感尺度

桜井(1993)により作成された1因子8項目のコンピテンス尺度である。自己効力感を自己の有能さへの認知とし、自己期待や有能感、物事を成し遂げることへの自信としてコンピテンスを捉え、桜井の尺度を採用した。自分に当てはまる内容について「非常に当てはまる：6」から「まったく当てはまらない：1」の6件法で求めた。

(6) ソーシャル・サポート尺度

ASD者の適応要因として、佐々木(2010)は、思春期・青年期における自己確立の過程のなかで重要な他者に受け入れられ、心理的に支えられているという感覚が持っていることが必要と述べていることから、サポートの知覚を学生用ソーシャル・サポート尺度(久田・千田・箕口, 1989)を参考に、心の支えとしての自己の承認欲求が満たされること、自己の存在を認め良きアドバイスをくれる支援を包含する文言のある項目を6項目抽出した。その6項目より「普段からあなたの気持ちをよく理解し、あなたの存在のすべてを認めてくれる」「あなたがする話にはいつも耳を傾けてくれ、いろいろとアドバイスをしてくれる」の2項目を作問した。サポート源を一人親、一人っ子に配慮し「家族からのサポート」、「友人からのサポート」、「先生からのサポート」とし、それぞれのサポートに作問した2項目ずつを割り当て、合計6項目とした。日頃、自分の周囲の人たちから感じている支援について当てはまることを「そうである：5」から「全くちがう：1」の5件法で回答を求めた。

4. 分析方法

調査データの分析に当たっては、統計ソフトSPSS.ver24, amos.ver24を用いた。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の分析

調査の実施に同意をした大学生 321 名から、すべての項目に同一得点の回答や途中までの回答、白紙の回答を分析対象から除外した。最終的に 307 名(男子 176 名, 女子 131 名, 平均年齢は 19.20 歳 ($SD=1.14$)) の回答を分析対象とした。アスリート大学生は 118 名, 18 歳が 22 名, 19 歳が 44 名, 20 歳が 28 名, 21 歳が 24 名, 平均年齢は 19.46 歳 ($SD=1.018$), 男子 81 名, 女子 37 名, 非アスリート大学生は 189 名, 18 歳が 77 名, 19 歳が 60 名, 20 歳が 30 名, 21 歳が 15 名, 22 歳が 5 名, 23 歳が 1 名, 25 歳が 1 名, 平均年齢は 19.04 歳 ($SD=1.184$), 男子 95 名, 女子 94 名であった。

(1) AQ

AQ合計得点の平均値は 3.69 ($SD=2.06$) であり, 最小値 0, 最大値 9 であった。アスリート大学生 ($n=118$) の平均値は 3.83, 標準偏差は 2.10, 最小値 0, 最大値 9 であった。カットオフポイント以上の得点者は 16 人であった。非アスリート大学生 ($n=189$) の平均値は 3.60, 標準偏差は 2.03, 最小値 0, 最大値 9 であった。カットオフポイント以上の得点者は 20 人であった。

カットオフポイント以上の得点者は 36 名(全体の 11.7%) で, アスリート大学生が 16 人, 非アスリート大学生が 20 人であった。

(2) 本来感尺度

逆転項目の処理をし, 合計得点を算出した。伊藤・小玉(2005)により, 信頼性が確かめられている尺度であるが, 先行研究(益子, 2013)において, 因子負荷量の低い項目の存在が示されていたことから, 因子構造の確認をしたところ, 本研究においては逆転項目の因子負荷量が .22 と低い数値であった。先行研究(益子, 2013)を参考に, 7 項目を 1 因子とした場合と第 4 項目「他人と自分を比べて落ち込むことが多い」を除外し 6 項目を 1 因子とした場合の α 係数を比較したところ除外した場合の方が, α 係数が高まること示されたため本研究においては 6 項目を採用した。6 項目を 1 因子とした α 係数は, .89 であった。

(3) ソーシャル・サポート尺度

最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈の可能性より 3 因子解を採用した。確認的因子分析(最尤法, プロマックス回転)の結果, 3 因子構造が確認され, 累積寄与率 86.94% であった。第 1 因子はサポート源が先生であることから「先生サポート」, 第 2 因子はサポート源が家族であることから「家族サポート」, 第 3 因子はサポート源が友人であることから「友人サポート」と命名した。「先生サポート」のクロンバックの α 係数は, .95, 「家族サポート」のクロンバックの α 係数は, .91, 友人サポートのクロンバックの α 係数は, .91 であった。Amos24.0 による確認的因子分析の結果, 適合度指標は $\chi^2=12.876, df=6, p=.045, GFI=.986, AGFI=.950, RMSEA=.061, CFI=.995, AIC=42.876$ となり 3 因子構造が確認された。

(4) ER89

ER89は畑・小野寺(2013)により信頼性が確認されている1因子構造の尺度である。尺度の信頼性係数を求めたところ、 $\alpha=.87$ となり十分な数値であった。

(5) 自己効力感尺度

自己効力感尺度は桜井(1993)によって信頼性が確認されている1因子構造の尺度である。信頼性係数を求めたところ $\alpha=.86$ となり、十分な数値であった。

2. AQ値による群分け

神尾ら(2013)の実施したテスト⁴⁾のカットオフポイント以下の人にも適応が困難となっている人たちの存在が報告されており、ASD特性が一定以上表れると社会適応が困難になることが示唆されていることから、テスト内容は異なるが、カットオフポイントより少ない得点の者の中にもリスクの高い者は存在すると考えられた。そこで、AQリスクの程度の群別を307名の平均値3.69 ($SD=2.06$)より少ない群:AQ低群 ($n=158$)、平均値3.69より多くカットオフポイント7より少ない群:AQ中群 ($n=113$)、カットオフポイント7以上:AQ高群 ($n=36$)に群別した。さらにその各群についてアスリート大学生:低群58名、中群44名、高群16名、非アスリート大学生:低群100名、中群69名、高群20名に群分けした。以降の分析に、この群分けを使用した。

3. 各要因におけるアスリート大学生と非アスリート大学生の差異の検討

(1) 記述統計及び相関分析

各尺度とも回答の合計値を尺度得点とした。アスリート大学生と非アスリート大学生別に各変数の記述統計量及び、各変数間のピアソンの積率相関係数、 α 係数を表1に示した。アスリート大学生において本来感と各変数との間に見られた有意な相関は、ER($r=.58, p<.01$)、自己効力感($r=.45, p<.01$)、家族サポート($r=.30, p<.01$)、友人サポート($r=.34, p<.01$)であった。ERと各変数との間に見られた有意な相関は、自己効力感($r=.44, p<.01$)、家族サポート($r=.20, p<.05$)、友人サポート($r=.26, p<.01$)、先生サポート($r=.21, p<.05$)であった。自己効力感と先生サポートとの間に有意な相関が見られた($r=.22, p<.05$)。家族サポートと友人サポート、先生サポートとの間に有意な相関が見られた($r=.56, p<.01$)、($r=.50, p<.01$)。友人サポートと先生サポートとの間に有意な相関が見られた($r=.33, p<.01$)。

非アスリート大学生において本来感と各変数との間に見られた有意な相関は、ER($r=.56, p<.01$)、自己効力感($r=.41, p<.01$)、家族サポート($r=.27, p<.01$)、友人サポート($r=.30, p<.01$)、先生サポート($r=.19, p<.01$)であった。ERと各変数との間に見られた有意な相関は、自己効力感($r=.46, p<.01$)、家族サポート($r=.21, p<.01$)、友人サポート($r=.37, p<.01$)、先生サポート($r=.27, p<.01$)であった。自己効力感と友人サポート、先生サポートとの間に有意な相関が見られた($r=.22, p<.05$)、($r=.28, p<.01$)。家族サポートと友人サポート、先生サポートとの間に有意な相

関が見られた($r=.49, p <.01$), ($r=.20, p <.01$)。友人サポートと先生サポートとの間に有意な相関が見られた($r=.40, p <.01$)。

表 1. 各変数の記述統計と単相関関係

	本来感	ER	自己効力感	家族サポート	友人サポート	先生サポート	平均値 (SD)	α
アスリート大学生	AQ	-.10	.02	-.05	-.09	-.15	.01	3.83(2.10)
	本来感		.58 **	.45 **	.30 **	.34 **	.16	20.85(4.90)
	ER			.44 **	.20 *	.26 **	.21 *	33.69(7.04)
	自己効力感				.10	.02	.22 *	29.00(6.70)
	家族サポート					.56 **	.50 **	8.45(1.74)
	友人サポート						.33 **	8.66(1.52)
	先生サポート							7.01(2.24)
非アスリート大学生	AQ	-.22 **	-.15 *	-.28 **	-.19 **	-.34 **	-.20 **	3.60(2.03)
	本来感		.56 **	.41 **	.27 **	.30 **	.19 **	18.37(5.99)
	ER			.46 **	.21 **	.37 **	.27 **	30.92(6.75)
	自己効力感				.10	.19 **	.28 **	24.64(8.07)
	家族サポート					.49 **	.20 **	8.19(2.11)
	友人サポート						.40 **	7.98(2.12)
	先生サポート							5.32(2.45)

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

(2) 学生種2水準(アスリート・非アスリート), AQ値3水準(低群・中群・高群)を独立変数とし、各要因を従属変数とする二要因分散分析の結果を表2に示した。

表 2. 大学生種別とAQ値の高さが各要因に及ぼす効果

	AQ	アスリート大学生			非アスリート大学生			主効果		交互作用																																																																																												
		低群	中群	高群	低群	中群	高群	アスリート・非アスリート F値 (df= 1, 301)	AQ F値 (df= 2, 301)	F値 (df= 2, 301)																																																																																												
本来感	M	21.34	20.61	19.69	19.09	18.09	15.70	14.04 ***	3.10 *	0.35 n.s.																																																																																												
	SD	4.98	5.09	4.05	6.18	5.65	5.55				ER	M	33.45	33.73	34.44	31.90	29.84	29.70	12.44 ***	0.54 n.s.	1.30 n.s.		SD	6.64	7.56	7.38	7.04	6.01	7.25	自己効力感	M	29.81	27.23	30.81	26.24	23.83	19.45	35.04 ***	4.50 *	4.60 *		SD	5.55	6.76	9.34	7.47	8.26	8.02	家族サポート	M	8.48	8.52	8.13	8.45	8.00	7.50	2.02 n.s.	1.62 n.s.	0.63 n.s.		SD	1.81	1.66	1.78	1.90	2.38	2.04	友人サポート	M	8.83	8.64	8.13	8.54	7.62	6.45	14.82 ***	9.06 ***	2.56 †		SD	1.23	1.77	1.67	1.57	2.37	2.63	先生サポート	M	6.90	7.00	7.44	5.57	5.36	3.95	42.33 ***	0.77 n.s.	3.03 *		SD	2.25	2.41	1.79
ER	M	33.45	33.73	34.44	31.90	29.84	29.70	12.44 ***	0.54 n.s.	1.30 n.s.																																																																																												
	SD	6.64	7.56	7.38	7.04	6.01	7.25				自己効力感	M	29.81	27.23	30.81	26.24	23.83	19.45	35.04 ***	4.50 *	4.60 *		SD	5.55	6.76	9.34	7.47	8.26	8.02	家族サポート	M	8.48	8.52	8.13	8.45	8.00	7.50	2.02 n.s.	1.62 n.s.	0.63 n.s.		SD	1.81	1.66	1.78	1.90	2.38	2.04	友人サポート	M	8.83	8.64	8.13	8.54	7.62	6.45	14.82 ***	9.06 ***	2.56 †		SD	1.23	1.77	1.67	1.57	2.37	2.63	先生サポート	M	6.90	7.00	7.44	5.57	5.36	3.95	42.33 ***	0.77 n.s.	3.03 *		SD	2.25	2.41	1.79	2.52	2.41	1.85																
自己効力感	M	29.81	27.23	30.81	26.24	23.83	19.45	35.04 ***	4.50 *	4.60 *																																																																																												
	SD	5.55	6.76	9.34	7.47	8.26	8.02				家族サポート	M	8.48	8.52	8.13	8.45	8.00	7.50	2.02 n.s.	1.62 n.s.	0.63 n.s.		SD	1.81	1.66	1.78	1.90	2.38	2.04	友人サポート	M	8.83	8.64	8.13	8.54	7.62	6.45	14.82 ***	9.06 ***	2.56 †		SD	1.23	1.77	1.67	1.57	2.37	2.63	先生サポート	M	6.90	7.00	7.44	5.57	5.36	3.95	42.33 ***	0.77 n.s.	3.03 *		SD	2.25	2.41	1.79	2.52	2.41	1.85																																			
家族サポート	M	8.48	8.52	8.13	8.45	8.00	7.50	2.02 n.s.	1.62 n.s.	0.63 n.s.																																																																																												
	SD	1.81	1.66	1.78	1.90	2.38	2.04				友人サポート	M	8.83	8.64	8.13	8.54	7.62	6.45	14.82 ***	9.06 ***	2.56 †		SD	1.23	1.77	1.67	1.57	2.37	2.63	先生サポート	M	6.90	7.00	7.44	5.57	5.36	3.95	42.33 ***	0.77 n.s.	3.03 *		SD	2.25	2.41	1.79	2.52	2.41	1.85																																																						
友人サポート	M	8.83	8.64	8.13	8.54	7.62	6.45	14.82 ***	9.06 ***	2.56 †																																																																																												
	SD	1.23	1.77	1.67	1.57	2.37	2.63				先生サポート	M	6.90	7.00	7.44	5.57	5.36	3.95	42.33 ***	0.77 n.s.	3.03 *		SD	2.25	2.41	1.79	2.52	2.41	1.85																																																																									
先生サポート	M	6.90	7.00	7.44	5.57	5.36	3.95	42.33 ***	0.77 n.s.	3.03 *																																																																																												
	SD	2.25	2.41	1.79	2.52	2.41	1.85																																																																																															

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

交互作用が有意であったのは、「自己効力感」, 「先生サポート」であり, 「友人サポート」は有意傾向であった。「本来感」「ER」「家族サポート」については有意ではなかった。交互作用が有意傾向以上であった「自己効力感」, 「先生サポート」「友人サポート」については、要因別単純主効果の検討と多重比較を行った。

「本来感」においては、学生種の主効果が有意であり($F(1,301)=14.04, p <.001$), AQ値の主効果が有意であった($F(2,301)=3.10, p <.05$)。交互作用は有意ではなかった($F(2,301)=0.35, n.s.$) (図1)。

「ER」においては、学生種の主効果が有意であり($F(1,301)=12.44, p <.001$), AQ値の主効果は有意でなかった($F(2,301)=0.54, n.s.$)。交互作用は有意ではなかった($F(2,301)=1.30, n.s.$) (図2)。

「自己効力感」においては、学生種とAQ値との間の交互作用が有意であった($F(2,301)=4.60, p <.05$)。単純主効果の検定をしたところ、非アスリート大学生においてAQ値の単純主効果が

自閉スペクトラム症リスクの高い大学生の適応要因の検討：アスリート大学生と非アスリート大学生の差異に着目して

有意であり($F(2,301)=7.77, p < .01$), 低群が高群より高く($p < .01$), 中群が高群より高かった($p < .05$)。AQ値における学生種の単純主効果が有意であり($F(1,301)=8.73, p < .01$), アスリート大学生の方が非アスリート大学生より高かった($p < .01$) (図3)。

家族サポートにおいては, 学生種の主効果がともに有意ではなかった($F(1,301)=2.02, n.s.$), ($F(2,301)=1.62, n.s.$)。交互作用は有意ではなかった($F(2,301)=0.63, n.s.$) (図4)。

友人サポートにおいては, 学生種の主効果が有意であり($F(1,301)=14.82, p < .001$), AQ値の主効果が有意であった($F(2,301)=9.06, p < .001$)。交互作用は有意傾向であった($F(2,301)=2.56, p < .10$)。単純主効果の検定をしたところ, 非アスリート大学生における単純主効果が有意であり($F(2,301)=12.88, p < .001$), 低群, 中群, 高群の順に友人サポートの得点が高かった。AQ値中群の単純主効果が有意であり($F(1,301)=8.17, p < .01$), アスリート大学生の友人サポート得点が高かった。AQ値高群の単純主効果が有意であり($F(1,301)=7.39, p < .05$), アスリート大学生の友人サポート得点が高かった(図5)。

先生サポートにおいては, 学生種の主効果が有意であり($F(1,301)=42.33, p < .001$), AQ値の主効果は有意ではなかった($F(2,301)=0.77, n.s.$)。学生種とAQ値の交互作用は有意であった($F(2,301)=3.03, p < .05$)。単純主効果の検定をしたところ, 非アスリート大学生における単純主効果が有意であり($F(2,301)=12.88, p < .001$), 低群, 中群, 高群の順に先生サポートの得点が高かった。AQ値において低群の単純主効果が有意であり($F(1,301)=11.62, p < .01$), アスリート大学生の先生サポート得点が高かった。

AQ値中群の単純主効果が有意であり($F(1,301)=12.97, p < .001$), アスリート大学生の先生サポート得点が高かった

AQ値高群の単純主効果が有意であり($F(1,301)=19.45, p < .001$), アスリート大学生の先生サポート得点が高かった(図6)。

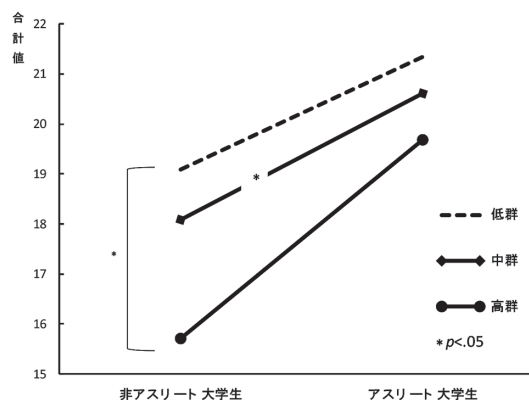


図1 学生種とAQによる本来感の比較

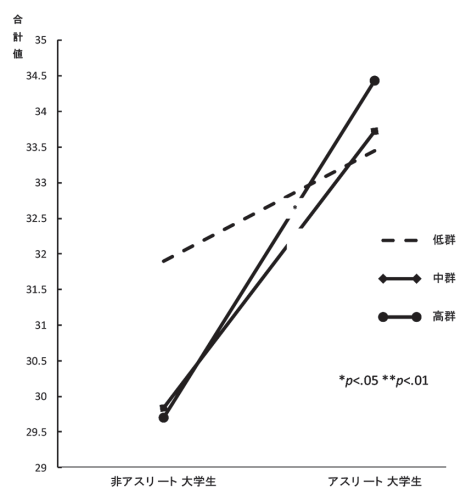


図2 学生種とAQによるERの比較

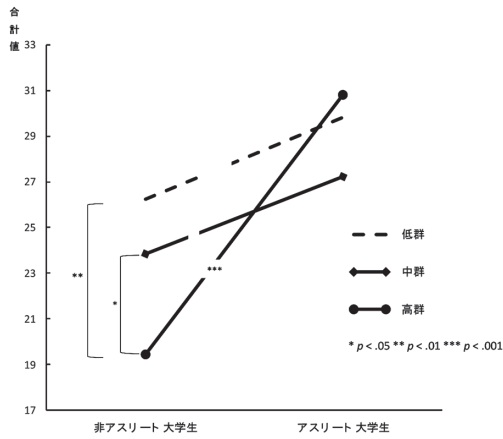


図3 学生種とAQによる自己効力感の比較

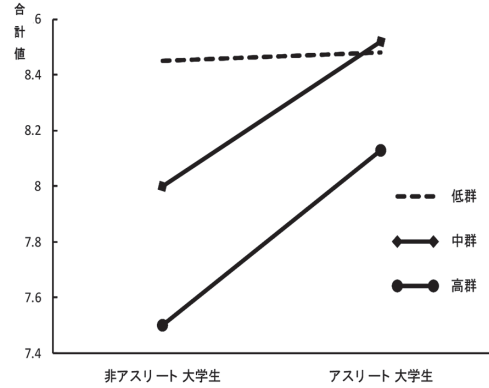


図4 学生種とAQによる家族サポートの比較

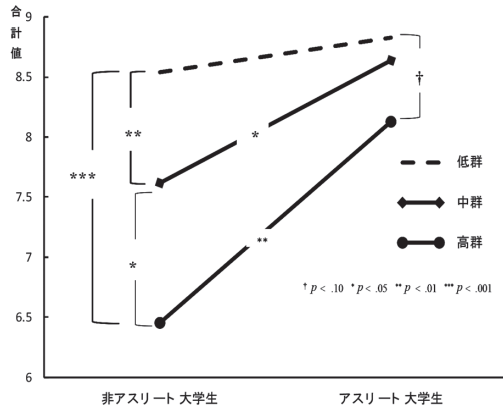


図5 学生種とAQによる友人サポートの比較

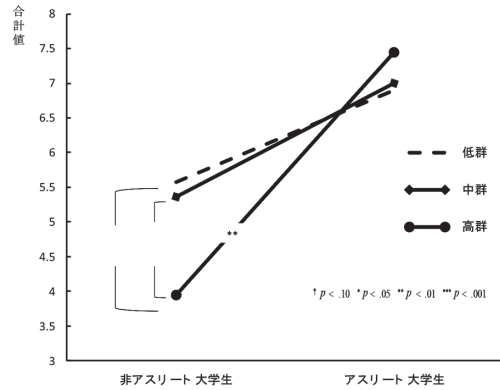


図6 学生種とAQ値による先生サポートの比較

IV. 考察

本研究の目的は、ASDリスクの高いアスリート大学生が保持すると考えられる適応に関する要因を非アスリート大学生と比較検討することであった。

本来感についてカットオフポイント以上のアスリート大学生の有する本来感が、非アスリート大学生の有する本来感の3水準すべてにおける得点より高い得点を有していた。学生種においてアスリート大学生の方が、非アスリート大学生と比較して有意に高かった。本来感の得点がアスリート大学生の方が非アスリート大学生より有意に高いという結果は、江田・伊藤・杉江(2009)と一致する。また、本来感得点がAQ値3水準別の比較においてもアスリート大学生の方が、3水準すべてにおいて有意に高い得点を有していた。このことは、ASDリスクの高いアスリート大学生は、

ASDリスクの高い非アスリート大学生と比較して、スポーツ競技を通じた高い自己効力感の実感と、そこに見出された自己の存在価値によるスポーツマン的アイデンティティの獲得が、より高い本来感を示したと考えられた。

相関分析では、非アスリート大学生においてAQと全要因間に有意な負の相関が見られ、アスリート大学生においては、AQと全要因との間に有意な相関は見られなかった。この結果よりアスリート大学生にとってのASDリスクは、全要因においてほとんど関連しないことが明らかとなった。このことは、本来感を高く保つということが、自分自身の欠点を自我脅威として受け取ることなく、安心してどのような局面においても自分を活かすことが出来る状態であること(Kernis,2003;伊藤,2006)を示していると考えられた。高い本来感を有するASDリスクの高いアスリート大学生は、アスリートであることにスポーツマン的アイデンティティを見出すことで、思春期・青年期の危機を回避していると言えるだろう。

周囲の状況に合わせて自己欲求を調節することで、日々のストレスに対処する自己コントロール力であり、本来感に影響力を持つER(佐々木・土田, 2016)において、アスリート大学生が非アスリート大学生と比較して有意に高かった。さらにASDリスクの高いアスリート大学生が、ASDリスクの高い非アスリート大学生と比較して有意に高く、他の水準のどのアスリート大学生よりも高いという結果であった。ERは生得的な要因であるが、遺伝的要因として説明される部分(男子 77%, 女子 70%)と残り(20～30%)の差異が、環境要因に起因するとされている(畑・小野寺, 2013)。環境要因に起因する差異の部分に、アスリートとしての環境とその環境へのASD特有の認知とが、ERを高めることにある程度寄与していると考えられる。そのためERの力が、他のどの学生より高く保たれ、大学生活において強い自己コントロール力を発揮出来ていると言えるのではないだろうか。このことは、アスリートとしてのストイックさともつながるのかも知れない。ただこの結果において、本稿の調査協力者であるアスリート大学生は、1大学のアスリート大学生であるため、所属する大学の環境が、アスリート大学生にとって非常に良い環境が保たれている状態であるということの影響と、ASDの特性としての「こだわり」や「ルールに対する完璧なまでの忠実さ」などの認知が及ぼすポジティブな影響と環境から受ける影響の相互作用については調査がなされていないため、本稿の結果を踏まえた更なる調査が必要と考える。

自己効力感においてアスリート大学生が、非アスリート大学生と比較して有意に高く、ASDリスクの高い大学生は、すべての水準においての他の大学生より高い結果であった。自己効力感においても、ASDリスクの高いアスリート大学生は、スポーツ競技の中に自己の存在価値を見出すことで高い有能感を感じているといえるだろう。このことが、スポーツマン的アイデンティティの獲得により思春期・青年期のリスクを回避する力となると同時に、本来感を高く保つ要因となっていることが出来るだろう。

家族サポートにおいては、すべての学生間で有意な差は得られなかった。このことはアスリートであるか否か、ASDリスクの高低に関係なく、家族からのサポートを同等のレベルで感じていること

を示しており、大学生という年齢に相当する発達課題である、親からの自立という心理的離乳に達したためと見ることが出来るだろう。

友人サポートにおいては、アスリート大学生と非アスリート大学生の間に有意な交互作用が認められ、アスリート大学生の得点が非アスリート大学生得点より有意に高い得点を示した。さらに、AQ値の低群・中群・高群すべての水準において、アスリート大学生の得点が有意に高い値を示したことは、アスリート大学生は、困った時に相談が出来、自分を承認してくれる、信頼のおける確かな友人の存在があることを認識しており、特に高群において顕著であり、友人の存在が本来感の高さに影響を及ぼしていると言えるだろう。

先生サポートにおいては、アスリート大学生と非アスリート大学生の間に有意な交互作用が認められ、アスリート大学生の方が有意に高い得点であったことは、アスリート大学生の方が、非アスリート大学生より、先生サポートをより享受していると感じていた。さらに、AQ値すべての水準においてアスリート大学生の方が、有意に高いサポート感を得ていると感じていた。アスリート大学生の場合、常に自分の競技の指導者としての先生が身近にいることから、この結果は当然の結果と見ることが出来るだろう。先生サポートを常に受け取っていることが、状況に応じた自己欲求の調節を促し、自己コントロールする力としてのERを高めているのではないだろうか。また自己効力感は、先生に承認されることで確かな力として定着しているのではないだろうか。自己効力感の定着は本来感にも良い影響を及ぼしていると考えられる。

以上のことから、本研究の目的とした仮説であるアスリート大学生と非アスリート大学生における適応要因としての本来感とその本来感の維持に関連する自己コントロール力であるER、自分の能力を信じることの出来る自己効力感、自分が支えられていると感じられ、困った時にサポートを求めることが出来る家族サポート、友人サポート、先生サポートの知覚が、アスリート大学生の方が非アスリート大学生よりも高いという仮説は、家族サポートにおいては支持されなかったが、それ以外の要因においてはすべて支持された。

仮説証明に用いた要因は、すべて本来感を高めることに関連する要因である(伊藤, 2006; 佐々木・土田 2016)。家族サポートを除く要因すべてにおいて、ASDリスクの高いアスリート大学生が高く保持していることが示された。ASDリスクの高いアスリート大学生は、スポーツ競技をすることに自分の存在価値を見出すスポーツマン的アイデンティティを獲得することで、本来感や本来感を維持する要因を高く保ち、二次障害やアイデンティティの危機に対処出来たと考えられることから、自分の存在価値を見出すことの出来るアイデンティティの獲得は、ASDリスクの高い者の思春期・青年期における二次障害やアイデンティティの危機に対応する有効な心理的支援の手がかりとなると考える。

VI. 今後の課題

ASDリスクの高いアスリート大学生が、スポーツマン的アイデンティティを獲得することにより、非アスリート大学生より本来感とその本来感を維持する要因を高く保つことが可能であることが示されたことは、スポーツ競技の中に自分の存在価値を見出すことが出来たことと関連があると考えられる。今回の調査は1つの大学のアスリート大学生のみにとどまっているため、他の大学への更なる調査が必要であろう。また自分の存在価値を見出すことにより本来感を高く保つことが可能とするならば、芸術やIT部門など幅広く調査をし、他の部門でも可能かどうかの確証を得たうえで、自分の存在価値が見出せる場の存在が、二次障害やアイデンティティの問題に対処可能な要因となることを明らかにしていきたい。また、ERの差異としての環境要因に依存する部分に関し、ASD特有の認知が及ぼすポジティブな影響と環境から受ける影響の相互作用が、ERの高さににどの程度の影響を及ぼすのかを明らかにする必要があるだろう。

〈引用文献〉

- American Psychiatric Association (2013). DIAGNOSTIC AND STATISTIC MANUAL OF MENTAL DISORDERS FIFTH EDITION American Psychiatric Publishing. (高橋三郎・大野裕(監訳) 染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉 (訳) 日本精神神経学会(日本語版用語監修)(2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎(2010). つながりの作法—同じでもなく違うでもなく—NHK出版
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*, New York: Plenum. Pp31-46.
- 江田香織・伊藤正哉・杉江征(2009). 大学生アスリートの自己形成における本来感と随伴的自己価値が精神的健康に及ぼす影響, *スポーツ心理学研究*, 36, 1, 37—47.
- ゲニラ・ガーランド(2000). ニキ・リンコ訳 ずっと普通になりたかった。花風社
- 畑潮・小野寺敦子(2013). Ego-Resiliency尺度(ER89)日本語版作成と信頼性・妥当性の検討, *パーソナリティ研究*, 22 (1), 37-47.
- Heatherton, T.F., & Wyland, C.L. (2003). Assessing self-esteem. In L. J. Shane & C. R. Snyder (Eds.) *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures*. Washington, DC.: American Psychological Association. Pp.219-233.
- 久田満・千田茂博・箕口正博(1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1)日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143 - 144.
- 本田秀夫(2017). 大人になった発達障害, *認知の神経科学*, 19, 33-39.
- 井上雅彦(2010). 二次障害を有する自閉症スペクトラム児に対する支援システム 脳と発達, 42, 209 - 212.
- 市川浩(1992). 精神としての身体 講談社学術文庫
- 伊藤正哉(2006). 自分らしくある感覚(本来感)についての心理学的研究 筑波大学博士(心理学)学位論文
- 伊藤正哉・小玉正博(2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がWell-beingに及ぼす影響の検討 *教育心理学研究*, 53(1), 74-85.

- Kernis, M.H.(2003).Optimal self-esteem and authenticity : Separating fantasy from reality. Psychological inquiry,14,83-89.
- Kurita, H., Koyam, T., & Osada, H. (2005). Autism- Spectrum Quotient- Japanese version and its short forms for screening normally intelligent persons with pervasive developmental disorders. Psychiatry and Clinical Neurosciences, 59, 490-496.
- 栗田広・長田洋和・小山智典・宮本有紀・金井智恵子・志水かおる(2003). 自閉症スペクトル指数日本版(AQ-J)の信頼性と妥当性 臨床精神医学, 32, 1235-1240.
- 神尾陽子・森脇愛子・武井麗子・稲田尚子・井口英子・高橋英俊・中鉢貴行(2013). 未診断自閉症スペクトラム児者の精神医学的問題, 精神経誌, 115, 6
- 益子洋人(2013). 大学生における統合的葛藤スキルと過剰適応との関連—過剰適応を「関係維持・対立回避行動」と「本来感」から捉えて—教育心理学研究, 61, 133 - 145.
- 中込四郎(1988). ある運動選手の生育史の中で生起した危機様態の分析. 体育学研究, 32, 231 - 240.
- 中込四郎(1993). 危機と人格形成—スポーツ競技者の同一性形成—道徳書院
- 桜井茂男(1993)自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要 29, 203-208.
- 佐々木和義・土田弥生(2016). 大学生の本来感に影響を及ぼす要因(2)—自閉症スペクトラム傾向の高さによる影響の検討— 日本教育心理学会第58回総会論文集, 635.
- 佐々木正美(2010). 発達障害への理解と対応—思春期をより円滑に乗り越えるために—脳と発達, 42, 179 - 183.
- 障害者差別解消法(2016).「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の制定(2013)法律第65号第6条第1項に基づく内閣府施行令32号
- 滝吉美知香・田中真理(2011). 思春期, 青年期の広汎性発達障害における自己理解, 発達心理学研究, 22, 3, 215—227.
- 土田弥生(2014). 自閉スペクトラム傾向と傷つきやすさ, レジリエンスの関係性の検討 人間科学研究, 27, 123.
- 内山登紀夫・江場加奈子(2004). アスペルガー症候群: 思春期における症状の変容, 精神科治療学, 19, 1085-1092.
- 柳楽明子(2017). 高機能自閉症スペクトラム障害の思春期を支える心理的支援, 心理臨床学研究, 35, 233-242, 13

〈注〉

- 1) 以降, 本論では神尾ら(2013)に従い, ASD傾向をASDリスクとした。
- 2) 親回答の対人応答性尺度(Social Responsiveness Scale: SRS)
- 3) スポーツ競技を続けていくことに自己の存在価値を見出すことで得るアイデンティティを本稿ではスポーツマン的アイデンティティと定義する。
- 4) 親回答の対人応答性尺度(Social Responsiveness Scale: SRS)